

書評

武田尚子著『瀬戸内海離島社会の変容

－「産業の時間」と「むらの時間」のコンフリクト－』

(2010 年, 御茶の水書房)

八尾 祥平

香川県には広島という小さな島がある。広島には、高い航海技術を持ったひとびとの集落があった。このため、広島では江戸時代には人名（にんみょう）と呼ばれる自治制度をしくことが幕府から認められており、江戸時代末期の咸臨丸の太平洋横断の際には、広島から 11 人もの水夫が選ばれたことから、当時の日本において、彼らは水夫として最高水準の技術を持っていたことが伺われる。こうした歴史は、一般にはあまり知られていないものの、現在もこの地域の記憶として住民には深く刻まれている。このように、瀬戸内海に浮かぶ小島であっても、そこは絶えず外界に開かれていた空間であり、島をめぐる変化の記憶が広島の住民の生活の根底に蓄積されてきた空間でもあったのである。

さて、本書が対象とする広島県内海町は田島と横島と呼ばれる島から成り立っており、島をめぐる変化の記憶がそこで生活するひとびとによって重層的に積み重ねられた離島社会のひとつである。本書では、戦後の瀬戸内海沿岸部における重工業を中心とする産業化の進展というマクロな社会変動を「産業の時間」と呼び、これに対して、内海町の集落で暮らすひとびとが、階層分解による職業移動や移住をきっかけとして集落の共同体原理を基盤にした多様なセーフティーネットを生みだし、住民の生活自体が再編成されていく過程を「むらの時間」と呼び、「産業の時間」と「むらの時間」との間にコンフリクトが生

じる過程で、集落のセーフティーネットがどのようなひとびとによって担われてきたのかを詳細かつ丹念な資料の分析に基づいて解き明かした労作である。

3部11章と1章の補論から構成される本書の内容を要約しよう。まず、内海町で見られた漁民層分解には集落ごとにタイムラグがあり、そのことが「産業の時間」と「むらの時間」とのコンフリクトへとつながっていく過程を各集落の生産関係と生活保障体系の再編成との連関から分析することの意義が示される(序章)。その上で、まず、第Ⅰ部では「むらの時間」の再編過程が描かれる。戦前から戦後にかけて、内海町の住民の暮らしが階層分解による職業移動や社会移動といった激しい変化の連続にさらされながらも、それを乗り越えるための生活保障の体系として、それまでに各集落に存在していたフォーマル・インフォーマルな社会関係が利用・再編されていった過程を、主に町集落(第1～3章)と箱崎集落(第4章)の2つの集落の住民の生活史の分析を通して描かれる。続いて、第Ⅱ部では「産業の時間」の再編過程についての分析がなされる。戦後の瀬戸内海における産業化の進行は、石炭、石油、そして、LPG へというエネルギー燃料の変化とそれに伴うロジスティクスを担う産業部門の発達・集積を背景としていた。これに伴い瀬戸内海が、日本政府の産業政策にリードされながら国内の動力源の輸送路から海外からのエネルギー基地や産業拠点へと再編されていった過程について分析がなされ、その結果、1950～60年代にかけての時期に瀬戸内海沿岸部の産業政策の策定に深く関わった政治家として、宮沢喜一の活動が浮かび上がってくる(第5章)。その一方で、横島集落では、戦後、漁船の動力化により漁民層分解が進行し、その過程で上層漁民は造船業の下請け企業経営者層として第二次産業の上層に世代間移動し、中下層漁民の多くは造船業の労働力として吸収されていったことが析出された(第6章)。そして、戦後の瀬戸内海における産業化の進展と漁民層分解による異なる産業間の労働力移動の結果として、内海町の対岸に位置するT造船は急激に成長し、空間利用のあり方にも産業化の影響がはっきりと目に見えるようになって

いった過程が描かれる（第7章）。こうして、第三部では、1970年代以降の内海町の内部には異なる利害関心を持つ社会集団が形成されるに至ったことにより発生した「むらの時間」と「産業の時間」とのコンフリクトとしてのLPG基地建設計画をめぐる推進派と反対派の衝突について分析がなされる。まず、LPG基地建設計画やこれに先立つ基盤整備としての内海大橋建設は国政・県政へのパイプを持つT造船とその下請け会社を中心にして推進され、これは石油ショック後の国内のエネルギー政策の変化への行政および企業側の対応として位置づけられた（第8章）。これに対して、T造船とは直接的な利害関係を持たない職業階層のひとつを中心としてLPG基地建設反対運動が起こり、最終的にはLPG基地建設阻止に成功した要因について分析を行った（第9章）。最後に、急激な階層分解と社会移動を経験した内海町のひとつとはそれを乗り越えるために、ともに働く仲間のネットワークだけでなく、宗教的空間や活動を通して得られるネットワーク、さらには、集落に伝わる祭礼とそこから得られる集落に蓄積された暗黙知の体系を、住民が自ら見つめ直し、新たに意味づけをしておされていたことが指摘される。こうした集落に世代を超えて伝わる多様な社会関係は、集落を結束・維持させる社会的機能を持ち、こうした共同体を維持する原理があることではじめて集落のなかにある様々なひとつの個人的な経験や知識が個人を超えて共有されることが可能となった。LPG基地建設反対運動の基層はこのように「むらの時間」の体系のひとつとがむすばれることで形成され、集落における祭礼のもつ、地域における経験を蓄積する機能の重要性は現在においても失われていないと結論づけられる（第10章）。なお、補論では、内海町の集落に暗黙知として集積されてきたような合意形成のあり方を理解するために、集落社会を成立させている合理性についての宮本常一の議論を手がかりにして、産業社会とは異なる村落社会の合理性が存在し、戦後の日本の地域社会を分析する際にはこうした二つの合理性の拮抗・再編成という視点の重要性が指摘される。

本書は、漁村研究、あるいは、労働研究のモノグラフとしても読む

ことができる。本書は、膨大なインタビューと史資料を地域社会研究の手堅い手法によって分析し、内海町のひとびとの暮らしが時間的に、空間的にどのような変容を遂げていったのかが丹念に描きだされている。そのため、本書は単なるミクロな地域社会研究のモノグラフにはとどまらず、国家の産業政策というマクロレベルでの変化が地域社会に影響をおよぼしていった過程を緻密に析出することに成功している。いわば、内海町という小さな窓から戦後の日本社会の産業化の進展と地域社会の変容という大きな風景が臨める本書は地域社会研究の最良の成果を示した力作といえるだろう。

本書で描かれているような、1970年代以降のLPG基地建設反対運動につながる地域の環境保護運動が、従来であれば保守と位置づけられるような階層のひとびとによって担われている点や、産業化の進展による階層分解の影響で地域社会は個人に分解され崩壊するのではなく、むしろ、地域社会の内部にある従来の社会関係が住民によって新たに意味づけなおされ、再編されることについてはすでに多くの論者による研究の蓄積がある。こうした分厚い研究の蓄積を超える本書の独自性は多岐にわたるものの、評者の研究関心を中心にしてコメントしたい。

本書では、LPG基地建設反対運動のリーダーのひとりが信念不動型として類型化されている。個人の信念といった、ヴェーバーの行為四類型でいえば感情的行為にあたる行為は、非合理的な行為としてみなされやすく、社会学的な分析や記述としては取り上げづらいトピックである。しかし、LPG基地建設反対運動の担い手にあたる階層のひとびとにとっては、個人の信念といった情念こそが、階層分解がすすみ、集落の内部においても異質性が高まってしまった状況下で運動にひとつのまとまりをもたせるための希少な社会関係の資源となっており、情念と運動の担い手の結びつきは避けては通れない問題であった。そこで、筆者は、反対運動のリーダーに強い信念が形成されるまでの過程を丹念に分析することで、単純な個人の情念を超えたところでこれを支える合理性のあり方を探ろうと試みる。この分析を通して浮かび

上がってきたのは、このリーダーの持つ反対運動を推進するための強い信念は決して衝動的なものではなく、集落における暗黙知の領域から徐々に形成されてきたものであり、こうした暗黙知に触れるための装置として集落における「うた」があり、このリーダーは集落の「うた」の世界に彼自身の身体を深く浸すことで異質性の高くなってしまった集落の中にあっても、ひとびとをひとつにまとめあげることが可能となったことが明らかとなった。こうした「むらの時間」によって歴史的に形成された暗黙知は、「産業の時間」のもつ合理性とは異なる合理性を持つのである。評者としては、リーダーが信念を持つ過程に加えて、反対運動に賛同するひとびとがひとつにまとまっていく過程についてももう少し具体的に触れれば本書の主旨がより明確になったのではないかと思われた。

本書を通して描かれた「産業の時間」と「むらの時間」のコンフリクトはどのような含意を持つのであろうか。評者は、「むらの時間」を「産業の時間」の急激な拡大による社会変動の影響を最も厳しい環境下で被るひとびとの痛みや不安を和らげる装置としてのみ捉えるべきではないと考える。「むらの時間」は、資本主義経済による合理化の論理とは異なる合理性を持つ社会は想像可能であることを示唆し、さらに、「むらの時間」は、戦後においても、日本社会の基層にあたるひとびとによって担われてきたことこそが最も重要であると考えている。紙幅の制限もあり、これ以上議論を進めることはできないが、評者としては、理論系・実証系を問わず、多くの研究者に本書が描き出した「産業の時間」と「むらの時間」が交錯する重厚な世界に触れてほしいと思う。

(やお しょうへい・首都大学東京大学院博士後期課程)